**説教20231231イザヤ61：10-62：3ヨハネ1：1-18「インマヌエルの神」**

**私たち人間の一人ひとりの内に住んで下さるインマヌエルの神イエス様をほめたたえます。**

**今日のヨハネ福音書の聖書箇所はクリスマスのシーズンには必ず読まれる箇所で、この地に来て下さった御子イエス様のことを証しする箇所です。その内容は計り知れず奥深く、私たちは地上生涯で何回、この箇所を読んでも、その意味を悟りきることは出来ません。ここに書かれてあることの意味を、私たちがはっきりと悟ることが出来るのは、天に召されてからのことになるのは間違いないでしょう。**

**私たちはこの地上にあって、楽しみながらこの箇所を読んで参りたいと願います。**

**さて、今日のヨハネ福音書にはキーワードが沢山記されています。言（ことば）、命、人間を照らす光、神の子、言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。栄光、恵みと真理などです。**

**それで今日は限られた時間ですので、人間を照らす光、栄光という言葉に絞って語って参りましょう。**

**私は先週、京都宇治にある実家に帰省してきました。それで、毎度のことですが、夜は床の間が有る和室で寝ることになるのです。その部屋と言うのが、雨戸を締め切った、奥まった場所にありますので、電気を消すと、本当の真っ暗闇になるのです。考えてみれば、現代社会で暮らしていて、こんな真っ暗な場所には中々いく事が出来ないと思います。でも数十年前までは、電灯も明かりも少なかったので、真っ暗闇は今よりは数多く存在したと思います。そして、２０００年前の聖書が書かれたころのことを覚えますと、今日の聖書箇所に出て来ます暗闇と言うのは、まさしくこの真っ暗闇のことであるに違いないのです。真っ暗闇と暗闇は大きく異なります。真っ暗闇の中では、目を閉じても、再び目を開いてもそこに在るのは暗黒ばかりです。とても恐ろしい世界です。しかし暗闇の中では、再び目を開いたときに、かすかに物体の輪郭が目に浮かんでくることでしょう。私たちは自分の目が動いて、そのようなかすかな輪郭を捕えることだけでも、そこに大きな希望を見出しうるのです。**

**２０００年前のクリスマスは真っ暗闇のさなかに訪れました。野宿をしながら夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちは、真っ暗闇の中で、主の栄光に照らされたのでした。**

**この出来事は、現代社会を生きる私たちにも当てはまることです。今の私たちは真っ暗闇を知らない者たちです。街角には常に街燈や色とりどりのイルミネーションが夜通し ともされています。それは、人間が真っ暗闇の恐ろしさを避けるためにともした、人工的な光です。この人工的な光も、ほどほどに在れば、祝福でありましょうが、今の現実をみていますと、この人工的な光が、真っ暗闇の最中で、イエス様に出会うというチャンスを妨げている面も否めないと思います。言い換えれば、イエス様のまことの光と言うのは、LED電球一つ着ければ、暗闇から救われると言った安価な事ではないのです。**

**私たちは時には、真っ暗闇に身を置いて、その恐ろしさを十分にこの身で味わうということも必要でしょう。そうすれば、そこにまことの光である救い主イエス様が来て下さることもあるはずです。**

**以上の様に、聖書を、自分の生活と密着させて読むということは大変大事なことです。そのように自分の生活の中で、聖書に書かれてあることを深く黙想していくと、ますますあなたの内にイエス様が宿って下さって、内側から、まことの光を放って下さることでしょう。**

**しかし、冒頭で申し上げましたように、この地上にいるときには、私たちが決して悟りきれず目にも見ることが出来ない物事も聖書には書かれています。**

**今日のヨハネ福音書1章 18節には次の様に記されています。**

**いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。**

**つまり、この地上においては、まことの光である御子イエス様は、見ることが出来ません。しかし示されています。ということです。まことの光が、この地上では見ることが出来ないというのは神の神秘ですが、このなぞについて少し黙想をしておきましょう。**

**今日のヨハネ福音書の箇所は、旧約聖書の冒頭の天地創造の次第を念頭に置いて書かれています。天地創造にも光という言葉がよく出て来ます。そして注目は、第一日目と第４日目です。**

**第一日目**

**神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。**

**神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。**

**夕べがあり、朝があった。第一の日である。**

**そして第４日目です。**

**神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。**

**夕べがあり、朝があった。第四の日である。**

**先週27日水曜日は、満月でした。夜空にこうこうと月が光輝いていました。神様は、天地創造の第４日目に、この月と、そして太陽と星とを造られたのです。**

**この様に、天地創造の第４日目からは、今に続くこの地上世界が形作られたことが、人間の頭でもイメージできるのですが、ではその前の三日間のことはどうでしょうか。この三日間には太陽も月も星もなかったのでした。未だ神さまがそれらを作っていなかったからです。しかし、第一日目には、神は「光あれ。」言われて、光があったのです。これがヨハネ福音書でいわれているまことの光です。すなわちまことの光であるイエス様は天地創造の前から有るお方なのです。**

**この天地創造の初めの3っ日間のことも、私たちは、この地上においてみることは出来ないでしょう。それは、天の国に入れられた後に、まことの光に照らされて、はじめてこの目で見ることが出来る世界なのです。**

**そして四日目から、太陽の光がこの地上を照らしはじめ、私たちが、日の光に照らされて、この地上のものを見ることが出来るようになったのでした。つまり私たちは、この地上にあって太陽の光こそ光の全てであるとイメージしがちですが、決してそうではありません。なぜなら太陽の光をもお造りになった、まことの光である主イエスキリストは、太陽の光に先立って有るお方だからです。主の御心ならば、その太陽の光も終わるときが来るのです。**

**不思議なことに、第一日目と第４日目のテキストには「神は光と闇を分け」という共通したテキストがあります。さて神は果たして、どちらの日に神様は光と闇を分けられたのか、と言う疑問がわいてきますが、それくらい、太陽の光の威力は、人間にとって大きいということを、神さまは言おうとされているのかも知れません。**

**まことの光であるイエス様の栄光と、太陽の光とは、対置されるものです。それでは、イエス様は、まことの光であって、太陽の光は、ニセの光であるということかと言いますと、そうではありません。**

**イエス様は、主の祈りの中で次の様に祈られました。「御心が天になるごとく、地にもなされます様に」と。つまり、イエス様は地上を照らす太陽の光にも、御心に適った、良き働きを成すように祈られているのです。**

**ですから太陽の光は、まことの光に逆行するようなニセの光ではないのです。でも、太陽の光は有限で、たちまち消え去るものであることは確かです。それに比べて、イエス様のまことの光は、無限で、決して消え去ることがない、一度灯されたら永遠に続く、永遠の光です。実は、私たちは、この地上で、この永遠の光というものをはっきりと目にしたことはないのです。**

**ヨハネの黙示録には、神の国で、この永遠の光に照らされる様が次の様に語られています。**

**ヨハネの黙示録 21章 22節から**

**わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。**

**ここで主とはイエスキリストのことであり、小羊とは、神の国に入れられた私たち一人ひとりのことです。**

**この様に天地創造の第３日目までと、終末の時に訪れる神の国のありさまは似通っていると思われます。**

**そして私たちは今、その中間の時代を、この地上で活かされているのです。そして、先ほど太陽の光も祝福されていると申しましたが、私たちもこの地上にあって、イエス様から祝福を受けているのです。**

**聖書では、永遠の祝福の喩えとして、結婚のことがよく語れられます。結婚と言うのは、この地上にあって、人間が受ける最大の祝福の一つだからです。例えば、キリストは花婿であり、私たち一人ひとりは、その花嫁であります。又、終末の時には、新しいエルサレムは、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来ると言われています。**

**今日のイザヤ書には、「主は救いの衣をわたしに着せ／恵みの晴れ着をまとわせてくださる。花婿のように輝きの冠をかぶらせ／花嫁のように宝石で飾ってくださる」というように、ここにも結婚のモティーフが華やかに語られています。**

**花婿の輝く冠も、花嫁の飾られた宝石も、太陽の光があるからこそ、光り輝きます。神様は、この地上にある者すべてがこの様に御心に適って光り輝くことを望んでおられ、そしてその一つ一つを祝福して下さるのです。**

**冠の輝きも宝石のきらびやかさも、そして太陽の光も、神さまの目から見れば、有限ではかないものです。しかし、神さまはそのはかないものごとをも用いて、私たちに永遠のまことの光のことを告げ知らせようとされているのです。**

**結婚式ということも、結婚するお二人が、インマヌエルの神イエス様に導かれて結婚するのでなければ、そこに在る冠の輝きも宝石のきらびやかさも、はかなくたちまちのうちに過ぎ去っていく事になってしまいます。**

**イエス様は十字架の上で、私たちに真っ暗闇を教えて下さいました。それから三日後に復活され、新しい永遠の命をあらわされることによって、この世のはかない光が、永遠のまことの光に変えられる道を、示して下さいました。**

**どうか、私たちがイエス様から与えられる新たな一年の暮らしにあって、聖書を証しする一歩一歩を刻んでいく事が出来ますようお祈りいたします。**

**祈り**

**天の父なる神**

**神よ、あなたはまことの光よりの光であり、この世の太陽の光をも作ってくださいました。その大いなる恵みに感謝し、あなたをほめたたえます。**

**この地上にある物事は、全てはかないですが、あなたは私たちを時に適って、よそおわせ、用いて下さいます。**

**まことの光である御子イエス様を、私たちの内に住まわせ、私たちを光の子として歩ませて下さいます。**

**どうか、私たちが暗闇の中で、あなたの光を知り、あなたを自分の内にお迎えすることが出来ますように。**

**十字架の暗闇の中で、死にも打ち克つことが出来る、まことの光が、確かに来られます。どうか私たちすべてにその光をお与えください。**

**父と聖霊**